

はしか 30代後半~50代前半要注意

接種1回 免疫不十分の可能性

来院した40代男性(右)にワクチンを接種する伊藤博道院長(左)東京都北区で

国内でははしか(麻疹)感染が、2020年以降では最多ペースで拡大している。子どもの病気というイメージが強かったが、免疫がなければ高齢者まで幅広い世代が感染し、重症化する恐れがある。中でも30代後半から50代前半の働き盛りの子育て世代は、ワクチン接種が制度上1回のみとなるケースが多く、免疫が十分でない可能性がある。強い空気感染力があるため、人の移動が活発になる大型連休は特に注意が必要だ。

(増井のぞみ)

4月下旬、東京都北区の「いとう王子神谷内科外科クリニック」を、1歳未満の乳児を育てる自営業男性(41)が訪れた。「ニュースでははしかが流行している」と知った。1歳にならないとワクチンを打てない子どもを守りたい」と男性。自分も抗体検査で免疫が不十分という結果が出て、この日、麻しん・風しん混合ワクチンを接種した。

このクリニックではワクチン納入が減っているという。厚生労働省は「ワクチンの2回接種が重要」との方針を示し、感染拡大を受け、メーカーにさらなる前倒し出荷を依頼。メーカー2社によると、安定供給ができていないが、局所的に需要が高まり卸業者の在庫が減っていることが原因だ。現状を踏まえ、伊藤博道院長(52)は「小学校に入る前の子どもの定期接種2回分を優先確保するべきだ。大人で不安な人は、まず抗体検査をして免疫の強さ(抗体価)を調べた方がいい」と指摘する。

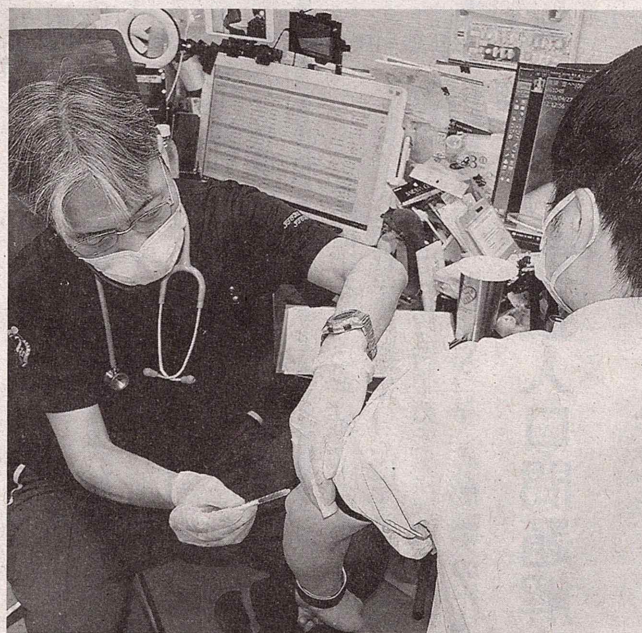
はしかワクチン接種の世代間の差

※伊東直哉・主任教授の取材に基づく

生年月日	標準的な接種回数	ポイント
1972年9月30日以前	0回	免疫ありの人が多い
72年10月1日~90年4月1日	1回のみ	特に注意が必要
90年4月2日~2000年4月1日	1~2回	母子手帳などで接種歴を要チェック
00年4月2日以降	2回	

ワクチン接種を公費で行う定期接種の制度は、時代が変わってきた。1972年9月以前に生まれた人は制度自体がなく、自然感染で免疫を持つ人が多い。特に注意が必要なのは、名古屋市立大の伊東直哉主任教授(感染症学)によると「72年10月から90年4月生まれ(36~53歳)の1回接種世代」だ。伊東さんはこの世代の注意点として、母子手帳で接種歴を確認し、0~1回接種の人は2

強い空気感染力「マスク・うがいを」



回復期の完了を促す。

90年4月~2000年4月生まれは1回接種だが、特例措置で定期接種を2回受けている可能性がある。00年4月以降生まれは定期接種2回が標準。伊東さんは「世代間のワクチン接種の差に留意する必要がある」と説く。

大型連休はどう過ごすべきか。北区のクリニックの伊藤院長は「混雑を避けてゆとりを持った移動」「マスク、手洗い、うがい」を勧める。伊東さんは「発熱など体調が悪かったら外出を控えてほしい。はしかは発疹が出る前から人にうつす可能性があり、軽い症状でも注意が必要だ」と呼びかける。

はしかはインフルエンザの約10倍の感染力がある。症状は高熱、発疹、結膜炎

などが、脳炎や肺炎に至るなどして致死率は約0.1%と非常に高い。特効薬がないだけに、ワクチン接種が重要。東京都新宿区の小学校で4月に起きた集団感染では、2回接種した人は軽症だった。

岡山大の森島恒雄名誉教授(小児科学)は「乳児が最も重症化しやすく、妊婦が感染すると胎児に影響する場合がある。緊急的なワクチン接種は妊婦にはできないが、1歳前はあり得る。その前に、周りの人たちがワクチン接種率を高めることが大事」と訴える。

国立健康危機管理研究機構(東京都新宿区)によると、今年の国内のはしか患者数は362人(4月22日現在)で、首都圏1都6県が7割を占めている。